

高齢者の自己や他者に対する信頼感が 事件被害のリスク認知に及ぼす影響

山崎優子¹⁾・仲真紀子²⁾・石崎千景³⁾・サトウタツヤ⁴⁾

(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構¹⁾・北海道大学大学院文学研究科²⁾・
名古屋大学大学院法学研究科³⁾・立命館大学文学部⁴⁾)

本研究の目的は、高齢者の詐欺事件やその他の犯罪に対するリスク認知を明らかにし、リスク認知に自身や他者に対する信頼がどのように関連するかについて明らかにすることである。振り込み詐欺、悪徳商法など、犯罪被害に遭う高齢者があとをたたない。手をかえ品をかえた犯罪に高齢者は騙され続けている。高齢者が犯罪被害に遭う理由として、認知機能の低下、孤立しがちな生活状況に加えて、高齢者に特有の“信頼感”（自分、他者、不信）が挙げられる。調査の結果、高齢者は詐欺被害者自身に責任があると判断する傾向にあり、この傾向は自分への信頼性の高さとともに高まることが示された。しかし、高齢者の被害が多い振り込み詐欺の被害者に対しては、この傾向が弱まること、信頼の程度に関わらず、自分だったら被害に遭わないと考える傾向が強いことが示された（研究1）。また、他者や自身に対する信頼感が高齢者の方が若者（大学生）より高い傾向にあり、窃盗の容疑者が高齢者の場合、高齢者は若者よりも嫌疑をかける程度が低いことが示された（研究2）。

キーワード：振り込み詐欺、詐欺被害、高齢者、信頼感、リスク認知
立命館人間科学研究, No.29, 3-17, 2014.

1. 問題

振り込み詐欺をはじめとする、犯罪被害に遭う高齢者があとをたたない。手をかえ品をかえた犯罪に高齢者は騙され続けている。

内閣府の平成24年版 高齢社会白書(全体版)によると、高齢者の刑法犯の被害は深刻である。高齢者を含む刑法犯の全被害認知件数は、平成14年の248万6千件をピークとして減少に転じており、平成22年は約128万5千件であった。65歳以上の高齢者の場合も同様の傾向がみられ、平成14年の約22万5千件をピークとして減少に転じ、平成22年は約13万8千件であった。しかし、全被害認知件数に占める65歳以上の高

齢者被害認知件数の割合をみると増加傾向にあり、平成14年では9.1%、平成22年では10.7%となっている。さらに、被害の内訳をみると、振り込み詐欺、架空請求詐欺、融資保証金詐欺及び還付金等詐欺等の振り込み詐欺のうち、特に高齢者の被害が多い振り込み詐欺の平成23(2011)年の認知件数は4,656件と前年より5.4%増加している。

また、同白書は、振り込み詐欺に加え、高額商品の購入をめぐるトラブルに巻き込まれる高齢者も多いことを明らかにしている。それによると、全国の消費生活センターに寄せられた契約当事者が70歳以上の相談件数のピークは、平成17年の約14万件である。しかし、平成22年度もピーク時に近い約13万7千件となっており、

相談内容を販売方法・手口別でみると、家庭訪問が15.6%、電話勧誘が15.4%の順となっている。

1. 高齢者は何故騙されるのか

なぜ高齢者が騙されやすいのかについては、複数の要因が考えられる。

要因の1つとして、ワーキングメモリの機能低下が挙げられる。ワーキングメモリは、情報保持機能と情報処理の機能を併せ持ち、2つの機能はトレードオフの関係にあるとされる。高齢者は、情報処理の速度に加え、記憶力や注意力の低下により、新しい事態や複数の処理を同時に行う実行機能が低下する傾向にある（佐久間 2012）。また、高齢者はワーキングメモリ容量よりも注意を抑制する能力が低下する傾向にある（Sweeney et al. 2001）。保持すべき情報と廃棄すべき情報の選別困難が生じたり、情報処理が複雑になると、処理資源を多く費やしてワーキングメモリの容量が低下する（立山・藤田 2009）。

ワーキングメモリの機能低下は、判断の適切性、たとえば、自分が詐欺被害に遭うかどうかの蓋然性判断を阻害する可能性がある。出来事の蓋然性についての判断は、ワーキングメモリの容量に依存するからである（Sprenger & Dougherty 2006）。Myntinen, Sundstrom, Vissers, Koivukoski, Hakuli, & Keskinen (2009) は、運転免許を取得しようとする者の中で、年齢が高い者程、実際の能力とは反して自分の運転能力を過信する傾向にあることを明らかにしている。これは、蓋然性判断の誤りを是正する機会が少ないことにも因るだろう。Kahneman & Tversky (1996) は、主観的な蓋然性判断は、多くの場合、一方の出来事に関する信念にもとづいてなされるとしている。詐欺に遭わないかどうかの判断は、詐欺に遭わないだろうという信念をどの程度もつかによってなされるのかもしれない。

もちろん、加齢によって判断力が向上するか変

わらないこともある（Healey & Hasher 2009）。たとえば、高齢者は若者よりも、自分の知識とその限界について、正しい信念を持つ傾向にある（Kovalchik et al. 2005）。また、蓋然性の判断と異なり、出来事が生起する頻度についての判断は、高齢になっても比較的正しく判断される傾向にある。これは、頻度に関する情報が自動処理される（Hasher & Chromiak 1977）ため、ワーキングメモリの容量にほとんど依存しないことに因る。

高齢者は若者と比べて情報の自動処理が多くみられる（永岑他 2009）が、このことが詐欺被害に遭う確率を高めている可能性がある。永岑他（2009）は、振り込め詐欺では、詐欺師が被害者との間に信頼性を築こうとするが、被害者は、身内がトラブルを抱えて困っていると思いつくと、身内に関する様々な情報が、自動的に処理される傾向が強まるとしている（例えば、泣いて訴える息子の声を聞くと、その刺激が過去の息子を助けた時の潜在的記憶に自動的にアクセスし、息子を救済する行動様式を選択する傾向が強まる）。また、「お金を振り込めばすべての負の感情や状態から解放される」というポジティブな情報が詐欺師から与えられると、被害者は自動的な意思決定に移行しやすくなるとしている。

振込詐欺の被害者は、極度なストレスのもと、考える時間も十分にないままに指定の口座に現金を振り込むことを要求される。急激なストレスは、判断過程（たとえば、方略の利用、自動的反応の修正、フィードバック処理）に影響を及ぼし（Starcke & Brand 2012）、ワーキングメモリの容量が小さい高齢者の場合、時間的制約によって判断の適切性が失われる（松田 2012）。

高齢者が詐欺被害に遭いやすい別の要因として、高齢者の記憶の性質が挙げられる。高齢者はポジティブな情報、中立的な情報と比較して、ネガティブな情報の記憶成績が悪い（Charles &

Mather 2003)。また、ネガティブな感情は、若者で増加し、高齢者で減少するのに対し、ポジティブな感情は高齢者で増加する傾向にある (Mroczek & Kolarz 1998)。こうしたポジティブバイアスは、詐欺に遭わないという認識に影響する可能性が考えられる。

さらにまた、高齢者の他者に対する信頼の高さが、詐欺被害に遭う可能性を高めている。天貝 (1997) は、「自分あるいは他者に対して抱く信頼できるという気持ち」を信頼感とし、信頼感には、自分への信頼、他者への信頼、不信の3つの側面があるとした。そして、自分への信頼が青年期・成人期前期を頂点として安定するのに対し、他者への信頼と不信は、加齢に伴い独立的に増加していくこと、成人期以降は、家族などからのサポートが他者への信頼に有意な正の影響を及ぼすことを明らかにした。

以上をまとめると、高齢者が詐欺被害に遭う要因として、高齢者に特有の認知機能の特性、記憶の性質、“信頼感”が挙げられる。

これらの要因のうち、本研究では、高齢者が詐欺被害に遭う要因として、“信頼感”について検討を行う。詐欺師は被害者の弱みや心理を巧みに利用して信用させ、金品を奪い取る。詐欺被害に遭うのが高齢者に限らないことを考えれば、詐欺被害の根本的な原因に、“信頼感”があると思われる。そこで、本研究では、天貝 (1997) のあげる信頼感 (自分、他者、不信) の高低によって、高齢者の詐欺事件に対するリスク認知 (詐欺事件に自分も遭うかもしれないという主観的な蓋然性判断) がどう異なるかについて検討する。さらにまた、上記の信頼感 (自分、他者、不信) の高低は、詐欺以外の軽犯罪の容疑者に対する嫌疑の程度にも影響を及ぼす可能性が考えられる。そこで、信頼感の高低によって、軽犯罪の容疑者に対するリスク認知 (容疑者が犯行を行ったかもしれないという嫌疑の程度) がどう異なるかについても検討する。

II. 本研究の目的

本研究の目的は、信頼感 (自分、他者、不信) の高低によって、高齢者による事件のリスク認知がどう異なるのかについて検討することである。

研究1では、下記の3点について検討する。

- ① 自分および他者に対する信頼感・不信の程度
- ② 信頼感の高低によって、被害者が被害を回避できたかもしれない可能性の評価 (= 被害に遭ったのはどの程度被害者自身の責任だと思うか) がどう異なるか?
- ③ 信頼感の高低によって、自分が事件の被害にあう可能性の認識がどう異なるか?

また研究2では、軽犯罪一般について、高齢者の信頼感とリスク認知との関係について検討する。検討にあたっては、高齢者の特徴をより明らかにする目的で、若年者 (大学生) との比較を行う。

III. 研究1

複数の詐欺事件をとりあげ、高齢者の被害に特有な事件とそうでない事件に対するリスク認知が異なるか、そしてこれらが、信頼感 (自分、他者、不信) とどう関連するかについて明らかにする。取りあげた詐欺事件は、高齢者に被害が多い、振り込め詐欺、詐欺商法の他に、裏口入学詐欺、結婚詐欺、スカウト詐欺の5件である。

1. 方法

参加者 札幌市内の高齢者専用マンション¹⁾の住人で、いずれも高齢者専用マンションに自立して生活されている方であり、大きな認知機能

1) いわゆる高級有料老人ホーム。住人に特別な介護を必要とする者はいない。

の低下は無いものと推察された46人 ($M=77.8$ 歳, $SD=6.43$ 歳。男性14名, 女性29名, 不明3名)。

材料 質問紙 A3 用紙1枚。質問紙は、5件の詐欺事件概要 (Table1) を示し、それぞれの詐欺事件について、被害者に対する責任の大きさ、自分が詐欺被害に遭っていた可能性、自分及び他者に対する信頼感や不信の程度を問う内容からなった。

被害者に対する責任の大きさについては、「被害者にはどの程度責任があると思いますか?」の質問に対して5件法 (1被害者には全く責任はない~5被害者にも大きな責任はある) で回答を求めた。自分が詐欺被害に遭っていた可能性については、「もし自分だったら、詐欺の被害にあっていたと思いますか?」の質問に対して5件法 (1絶対にだまされなかったと思う~5絶対にだまされたと思う) で回答を求めた。

自分や他者に対する信頼感及び不信の程度を

測る質問項目は、天貝 (1997) の信頼感尺度 (成人版) にもとづいて作成し、4件法 (1あてはまる~4あてはまらない) で回答を求めた。

手続き 調査実施者はあらかじめ、高齢者専用マンションのマネージャーに、住人に対する調査を依頼し、住人によびかけていただいた。調査当日、参加者はマンション内にある会議室で調査に参加した。調査実施者は参加者に対して、個人情報をお公にすることはないこと、調査概要について説明し、協力をよびかけた。そして、協力に同意した参加者に対して質問紙を配布し、回答を求めた。調査実施者は、「これからいくつかの事件について、率直なご意見をうかがいます」と説明し、質問紙の各項目および質問項目を前面スクリーンに映すと同時に、声に出してゆっくりと読みあげた。参加者は、音声と画面で内容を確認のうえ、質問紙に回答した。調査実施者は、1問毎に参加者が回答したのを確認し、次の質問を読み、回答を求めた。参加者か

Table 1 研究1で提示した詐欺事件概要

ケース	被害者	事件概要
振り込め詐欺	Aさん (60歳、女)。夫を亡くして現在は、マンションで一人暮らし。	大学生の孫を名乗る男から、「交通事故を起こしたので示談にするための100万円を貸して欲しい」と電話で言われ、お金を振り込んでしまった。振り込み詐欺のことは、ニュースで知っていた。
詐欺商法	Dさん (30歳、女)。腰痛の持病がある。	霊能者に、腰痛は悪霊のせいだと言われ、祈祷料50万円を支払った。しかしよくならず、別の霊能者のところに行き、そこでも祈祷料50万円を支払った。そこでもよくならなかった。2人の霊能者は詐欺で逮捕された。
裏口入学詐欺	Bさん (50歳、男)。一人息子の父親。	息子を医大に入れてやるという話しを男からもちかけられた。男は「入学できるかどうかは関係者への裏金で決まる」、「これまでに5人を医大に入れたことがある」と話した。100万円を渡したが、息子は不合格だった。
結婚詐欺	Cさん (40歳、男)。独身。	美人で明るい25歳の女性と付き合いことになった。女性には悪い噂があり、身分不相応に高価な洋服をいつも着ていた。しかしCさんは気にせず、貯金100万円を使い果たしたところで結婚詐欺だとわかった。
スカウト詐欺	Eさん (20歳、女)。大学生。	モデル事務所の男からモデルにならないかと持ちかけられ、登録料100万円を要求された。友達の反対にもかかわらず、アルバイトで貯めた100万円を男に渡してしまった。その直後から、男とは連絡が取れなくなった。

らの質問については、調査実施者ととも調査協力者3人が対応した。所要時間はおよそ30分であった。

2. 結果

以下、(1) 自分及び他者に対する信頼と不信の程度、(2) 詐欺被害者の責任の大きさ、(3) 自分が被害者の立場だったら騙された可能性の認識について、順に示す。

(1) については、回答に抜けのあった17人、(2) と(3) については回答に抜けのあった6人をそれぞれ除いて分析を行った。

(1) 自分及び他者に対する信頼性と不信の程度

天貝(1997)の信頼感尺度(成人版)にもとづいて作成した質問項目に対する回答結果を1(あてはまらない)～4(あてはまる)に変換し、“自分への信頼”、“他者への信頼”、“不信”を算出した(数値が高いほど、それぞれの程度が高い)。

自分への信頼、他者への信頼、不信の平均値は、それぞれ3.2、3.1、2.5、標準偏差はそれぞれ0.5、0.4、0.6であった。自分や他者への信頼については肯定する傾向にあったのに対して、“不信”については、“肯定”、“否定”のどちらにも偏らない傾向が示された。

(2) 被害者の責任の大きさ

5件の詐欺事件の被害者に対する責任の大きさについての認識は、“自分への信頼”、“他者への信頼”、“不信”の程度によって異なる傾向がみられるかについて、検討を行った。

検討にあたっては、“自分への信頼”、“他者への信頼”、“不信”それぞれについて、高群と低群に(高群と低群のデータ数ができるだけ同じになるように)分類した。

“自分への信頼”については、3.2以上の15人を高群、3.2未満の12人を低群とし、“自分への

信頼”(2:高群,低群)と“詐欺事件の種類”(5: Table1に示した5つのケース)を独立変数、“被害者に対する責任の大きさ”を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用は有意でなかった($F(4, 100)=51, ns$)が、“自分への信頼”の主効果と“詐欺事件の種類”の主効果が有意であった(それぞれ $F(1, 25)=6.19, p<.05$; $F(4, 100)=4.54, p<.005$)。“詐欺事件の種類”の主効果における多重比較(ライアン法、以下も同様)を行った結果、振り込め詐欺(4.1)は、裏口入学詐欺(4.8)およびスカウト詐欺(4.6)よりも有意に低く、詐欺商法(4.2)は裏口入学詐欺よりも有意に低かった(いずれも $p<.05$)。

“他者への信頼”については、3.3以上の13人を高群、3.3未満の14人を低群とし、“他者への信頼”(2:高群,低群)と“詐欺事件の種類”(5: Table1に示した5つのケース)を独立変数、“被害者に対する責任の大きさ”を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用および“他者への信頼”の主効果は有意ではなかった(それぞれ $F(4, 100)=1.78, F(1, 25)=0.00$,いずれも ns)が、“詐欺事件の種類”の主効果が有意であった($F(4, 100)=4.94, p<.005$)。

“不信”については、2.5以上の15人を高群、2.5未満の12人を低群とし、“不信”(2:高群,低群)と“詐欺事件の種類”(5: Table1に示した5つのケース)を独立変数、“被害者に対する責任の大きさ”を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用および“不信”の主効果は有意ではなかった(それぞれ $F(4, 100)=.73, F(1, 25)=.115$,いずれも ns)が、“詐欺事件の種類”の主効果が有意であった($F(4, 100)=4.82, p<.005$)。

以上、“自分への信頼”が高い者は低い者よりも詐欺事件の被害者の責任が大きいと判断する傾向がみられた。また、“高齢者が被害に遭いやすい振り込め詐欺が、裏口入学詐欺よりも被害者の責任が小さいと判断される傾向にあった。

Figure1 に、詐欺被害者に対する責任の大きさの評価値を群別に示した。

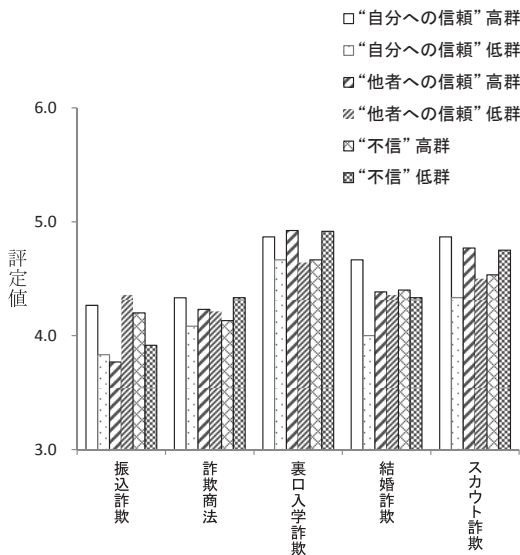


Figure1 詐欺被害者に対する責任の大きさ

(3) 自分が騙された可能性

5件の詐欺事件の被害者に対して、自分が騙された可能性についての認識は、“自分への信頼”、“他者への信頼”、“不信”の程度によって異なる傾向がみられるかについて、検討を行った。検討にあたっては、(2)と同様に、“自分への信頼”、“他者への信頼”、“不信”をそれぞれ高群と低群に分けた。

“自分への信頼” (2: 高群, 低群) と“詐欺事件の種類” (5: Table1に示した5つのケース) を独立変数, “自分が騙された可能性”を従属変数とする2要因の分散分析を行った結果, 交互作用, 自分への信頼の主効果, 詐欺事件の種類の主効果のいずれも有意ではなかった (それぞれ $F(4, 100)=1.12$, $F(1, 25)=1.11$, $F(4, 100)=1.53$, いずれも *ns*)。

“他者への信頼”と“詐欺事件の種類” (5: Table1に示した5つのケース) を独立変数, “自分が騙された可能性”を従属変数とする2要因の分散分析を行った結果, 交互作用, 他者への

信頼の主効果, 詐欺事件の種類の主効果のいずれも有意ではなかった (それぞれ $F(4, 100)=1.56$, $F(1, 25)=.12$, $F(4, 100)=1.58$, いずれも *ns*)。

“不信”と“詐欺事件の種類” (5: Table1に示した5つのケース) を独立変数, “自分が騙された可能性”を従属変数とする2要因の分散分析を行った結果, 交互作用, 不信の主効果, 詐欺事件の種類的主効果のいずれも有意ではなかった (それぞれ $F(4, 100)=.61$, $F(1, 25)=1.11$, $F(4, 100)=1.67$, いずれも *ns*)。

5件法 (1絶対になだまされなかったと思う~5絶対になだまされたと思う) で回答を求めた5つの事例それぞれに対する“自分が騙された可能性”の平均値は2.0 (標準偏差1.2) であった。

参加者は, 自分への信頼, 他者への信頼, 不信の高低にかかわらず, 提示されたどの詐欺事件についても, 「自分だったら騙されなかった」と思う傾向にあった。

3. 研究1の考察

研究1から, 高齢者の自分への信頼, 他者への信頼は, 高い傾向が示された。

また, 詐欺被害者に対する責任は, 相対的に大きいと判断されたが, “自分への信頼”の高群が低群よりも大きい一方で, “他者への信頼”および“不信”の高群と低群でちがいはみられなかった。得られた結果は, 詐欺被害に遭ったのは被害者自身の責任と参加者が考える傾向にあったこと, この傾向は, 自分への信頼が高い者で強まることを示している。つまり, 自分への信頼が高ければ, 詐欺被害に遭わないと参加者は考える傾向にあった。また, 振込詐欺の被害者に対しては, 裏口入学詐欺やスカウト詐欺の被害者に対してよりも, 被害者の責任は小さいと判断する傾向にあった。このことは, 被害者が自分と同じ高齢者か, 高齢者に特有の事件かにも依存して, 被害者の責任を判断する可能

性を示している。

自分が詐欺被害に遭った可能性については、信頼感（自分、他者、不信）の程度にかかわらず、低いと判断する傾向が示された。つまり、自分が詐欺被害に遭わないかどうかの蓋然性判断は、“信頼感”に依存しないことが示された。

IV. 研究 2

軽犯罪一般について、高齢者の信頼感とリスク認知との関係について検討する。検討にあたっては、高齢者の特徴をより明らかにする目的で、若年者（大学生）との比較を行う。

1. 方法

参加者 いずれも高齢者専用マンションに自立して生活されている方であり、大きな認知機能の低下は無いものと推察された 29 人 ($M=75.3$ 歳, $SD=6.5$ 歳。男性 7 名, 女性 17 名, 不明 5 名)。札幌市内の大学生 68 人 ($M=19.8$ 歳, $SD=1.6$ 歳。男性 27 名, 女性 41 名)。

材料 質問紙 A3 用紙 1 枚。質問紙は、2 件の軽

犯罪事件それぞれの容疑者に対する嫌疑の程度、容疑者に関連する情報が判断に影響した程度を問う内容、自分や他者に対する信頼感や不信の程度を問う内容からなった。

2 件の軽犯罪事件のうち、ケース A は万引き（事件概要は Table2 を参照）で、容疑者に対する嫌疑の程度を問う質問「A さんは B さんのお金を盗んだと思いますか」に対して、5 件法（1 きっと盗んでいない～5 きっと盗んだ）で回答を求めた。また、容疑者に関連する情報として、① A さんの性格、② A さんと地域とのかかわり、③ A さんの経済状況、④ A さんが以前万引きをしていたという話、⑤ B さん宅で A さんを見かけたという話の 5 項目（Table3 の①～⑤）を提示し、これらの情報が判断に影響した程度を問う質問「上記の判断（A さんはお金を盗んだと思うか？）にどの程度影響しましたか」について、5 件法（1 全く影響しなかった～5 強く影響した）で回答を求めた。

ケース C は器物損壊（事件概要は Table2 を参照）で、容疑者に対する嫌疑の程度を問う質問「C さんは、ピアノ教室の窓ガラスを割った

Table2 研究 2 で提示した軽犯罪の概要

ケース	容疑者	事件概要
A 万引き	A さん (70 歳、女)。一人息子とは離れて暮らしており、現在は独り暮らし。A さんは物静かな性格で、友達が少なく、近所付き合いもほとんどない。1 年前に友人の保証人になったことが原因で、借金を背負い、生活するお金にも困ってしまった。	A さんの近所に住む B さん宅でお金が盗まれるという事件が起こった。すると、A さんについて悪いうわさがたった。以前 A さんが住んでいた近所の人によると、A さんは近所のスーパーで万引きを常習的にしていたという。また、事件の発生した時間帯に、B さん宅付近で A さんを見かけた人がいるという話まで出てきた。
C 器物損壊	C さん (20 歳、女)。女子大生。両親と弟とは離れて暮らしており、現在は独り暮らし。C さんは明るい性格で、友達も多く、大学の部活動にも積極的に参加していた。授業にも必ず出席していた。C さんは近所のピアノ教室にかよっていたが、先生との折り合いが悪くなり、ピアノ教室をやめた。	C さんの通っていたピアノ教室で、窓が割られるという事件が起こった。すると、C さんについて悪いうわさがたった。C さんの中学校の同級生によると、C さんはかんしゃくを起こして、教室の窓ガラスを割ったことがあるという。また、事件の発生した時間帯に、ピアノ教室の付近で C さんを見かけた人がいるという話まで出てきた。

と思いますか?」について、5件法(1きつと割っていない～5きつと割った)で回答を求めた。また、ケースCの容疑者に関連する情報として、⑥Cさんの性格、⑦Cさんの大学生生活、⑧Cさんとピアノ教室の先生との関係、⑨Cさんが以前、中学校の窓ガラスを割ったことがあるという同級生の話、⑩ピアノ教室付近でCさんを見たという話の5項目(Table3の⑥～⑩)を提示し、これらの情報が判断に影響した程度を問う質問「上記の判断(Cさんは窓ガラスを割ったと思うか?)にどの程度影響しましたか」について、5件法(1全く影響しなかった～5強く影響した)で回答を求めた。

信頼感や不信の程度を問う質問項目は、研究1と同様に、天貝(1997)の信頼感尺度(成人版)にもとづいて作成した質問項目に対して、4件法(1あてはまる～4あてはまらない)で回答を求めた。

手続き 高齢者に対しては、調査実施者があらかじめ、高齢者専用マンションのマネージャー

に、住人に対する調査を依頼し、住人によびかけていただいた。調査当日、参加者はマンション内にある会議室で調査に参加した。大学生(若者)は、講義時間中に調査に参加した。

調査実施者は参加者に対して、個人情報に公開することはしないこと、調査概要について説明し、協力をよびかけた。そして、質問紙を配布し、調査協者に対して回答を求めた。調査実施者は、「これからいくつかの事件について、率直なご意見をうかがいます」と説明し、質問紙の各項目および質問項目を前面スクリーンに映すと同時に、声に出してゆっくりと読みあげた。参加者は、音声と画面で内容を確認のうえ、質問紙に回答した。調査実施者は、1問毎に参加者が回答したのを確認し、次の質問を読みあげ、回答を求めた。参加者からの質問については、調査実施者ととも調査協力者3人が対応にあたった。

2. 結果

以下、(1)容疑者に対する嫌疑の程度、(2)

Table3 参加者ごとの各項目の平均値と標準偏差

項目	高齢者	大学生	全体
Aさんに対する嫌疑の程度	2.1 (0.9)	2.8 (0.7)	2.7 (0.8)
Cさんに対する嫌疑の程度	2.1 (1.1)	2.5 (1.0)	2.1 (1.0)
全体	2.1 (1.0)	2.7 (0.9)	2.5 (1.0)
Aさんに対する嫌疑に影響した程度			
① Aさんの性格	2.7 (1.2)	3.1 (1.4)	3.0 (1.4)
② Aさんと地域とのかかわり	2.6 (1.2)	3.2 (1.2)	3.1 (1.3)
③ Aさんの経済状況	2.9 (1.3)	3.5 (1.0)	3.4 (1.1)
④ Aさんが以前万引きをしていたという話	3.0 (1.3)	3.6 (1.2)	3.4 (1.2)
⑤ Bさん宅でAさんを見かけたという話	2.7 (1.0)	2.8 (1.2)	2.8 (1.2)
全体	2.8 (1.2)	3.3 (1.2)	3.1 (1.2)
Cさんに対する嫌疑に影響した程度			
⑥ Cさんの性格	2.8 (1.4)	2.9 (1.3)	2.9 (1.3)
⑦ Cさんの大学生生活	2.8 (1.4)	2.4 (1.3)	2.5 (1.3)
⑧ Cさんとピアノ教室の先生との関係	2.8 (1.4)	3.4 (1.0)	3.2 (1.1)
⑨ Cさんが以前、中学校の窓ガラスを割ったことがあるという同級生の話	2.8 (1.3)	3.5 (1.2)	3.3 (1.2)
⑩ ピアノ教室付近でCさんを見たという話	2.7 (1.2)	3.1 (1.1)	3.0 (1.1)
全体	2.7 (1.3)	3.1 (1.2)	3.0 (1.3)

()内は標準偏差

信頼感（自分，他者，不信）が，高齢者と大学生で異なるかについて明らかにし，さらに，(3) 容疑者に対する嫌疑と，信頼感との関連の強さについて明らかにする。

(1) については，回答に抜け等があった13人（大学生4人，高齢者9人）を除外し，(2) については，回答に抜け等があった7人（大学生4人，高齢者3人）を除外し，分析を行った。

(1) 容疑者に対する嫌疑の程度

参加者の評価値を従属変数，参加者（2：高齢者，大学生）とケース（2：A，C）を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果，参加者の主効果が有意であった（ $F(1, 82)=7.90, p<.01$ ）。高齢者（2.1）は大学生（2.7）よりも容疑者に対する嫌疑の程度が有意に低かった。一方，ケースの主効果，交互作用は有意でなかった（それぞれ $F(1, 82)=1.08, F(1, 82)=1.08$ ，いずれも *ns*）。

Table3に，A, Cそれぞれの容疑者に対する嫌疑の程度，容疑者に関連する情報が嫌疑に影響した程度の平均値と標準偏差を参加者別に示した。

(2) 自分及び他者に対する信頼と不信

天貝（1997）の信頼感尺度（成人版）にもとづいて作成した質問項目に対する回答結果を1（あてはまらない）～4（あてはまる）に変換し，“自分への信頼”，“他者への信頼”，“不信”を算出した（数値が高いほどそれぞれの程度が高い）。

“自分への信頼”，“他者への信頼”，“不信”それぞれについて，参加者（2：高齢者，大学生）を独立変数，参加者の評価値を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果，“自分への信頼”の主効果が有意であった（ $F(1, 88)=24.40, p<.001$ ）（高齢者3.4，大学生2.8）。“他者への信頼”，“不信”については，有意な効果

は得られなかった（それぞれ $F(1, 88)=.72, F(1, 88)=2.62$ ，いずれも *ns*）。“自分への信頼”については，高齢者が大学生よりも高かった。

(3) 容疑者に対する嫌疑と，信頼感との関連の強さ

回答に抜け等のあった18人を除外し（高齢者9人，大学生7人），下記の分析を行った。

Aさんに対する嫌疑（1きっと盗んでいない～5きっと盗んだ）に影響する潜在的な要因の存在を確かめるために，嫌疑の程度への影響の大きさを求めた①～⑤の項目（①Aさんの性格，②Aさんと地域とのかかわり，③Aさんの経済状況，④Aさんが以前万引きをしていたという話，⑤Bさん宅でAさんを見かけたという話）について，因子分析を行った。1回目の因子分析（主因子法）では，固有値は，2.301, 1.759, .459と変化した。回転前の第2因子までの累積寄与率は，81.191であった。暫定的に2因子と想定して，2回目の因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。Table4はその結果である。2因子間の相関は，-.117，クロンバックの α 係数は，第1因子が.831，第2因子が.861であった。

Table4をみると，第一因子には，Aさんの嫌疑を高める項目が高い負荷量を示していることから，「嫌疑を高める情報」因子と命名した。第二因子には，Aさんの性格などの項目が高い負荷量を示していることから，「性格」因子と命名した。

Table4 パターン行列（Aさんのケース）

	因子	
	1	2
要因④	.888	-.036
要因⑤	.822	-.101
要因③	.677	.171
要因②	.069	.874
要因①	-.041	.874

Cさんに対する嫌疑(1きつと割っていない～5きつと割った)に影響する潜在的な要因の存在を確かめるために、嫌疑の程度への影響の大きさを求めた⑥～⑩の項目(⑥Cさんの性格、⑦Cさんの大学生生活、⑧Cさんとピアノ教室の先生との関係、⑨Cさんが以前、中学校の窓ガラスを割ったことがあるという同級生の話、⑩ピアノ教室付近でCさんを見たという話)について、因子分析を行った。1回目の因子分析(主因子法)では、固有値は、2.606、1.360、.428と変化した。回転前の第2因子までの累積寄与率は、79.326であった。暫定的に2因子と想定して、2回目の因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。Table5はその結果である。2因子間の相関は.325、クロンバックの α 係数は、第1因子が.838、第2因子が.812であった。

Table5をみると、第一因子には、Cさんの嫌疑を高める項目が高い負荷量を示していることから、「嫌疑を高める情報」因子と命名した。第二因子には、Cさんの性格などの項目が高い負荷量を示していることから、「性格」因子と命名した。

Table5 パターン行列(Cさんのケース)

	因子	
	1	2
要因⑨	.908	-.111
要因⑩	.738	.035
要因⑧	.736	.114
要因⑦	-.006	.923
要因⑥	.016	.734

次に、上記の2因子について因子得点および下位尺度得点を求め、それらが参加者と因子間で異なるかについて検討した。

Aさんのケースについて、因子得点を従属変数、因子(2:嫌疑を高める情報、性格)と参加者(2:高齢者、若者)を独立変数とする2要因

の分散分析を行ったが、因子の主効果、参加者の主効果、交互作用はいずれも有意でなかった(それぞれ $F(1, 77)=.00$, $F(1, 77)=1.61$, $F(1, 77)=.01$, いずれも *ns*)。

次に、Aさんのケースの「嫌疑を高める情報」因子を構成する項目(Table3の③～⑤)に対する回答の平均値を「嫌疑を高める情報」得点、「性格」因子を構成する項目(Table3の①, ②)に対する回答の平均値を「性格」得点とし、嫌疑への影響の程度を従属変数、得点(2:嫌疑を高める情報、性格)と参加者(2:高齢者、若者)を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、参加者の主効果が有意であった($F(1, 77)=6.27$, $p<.05$)が、得点の主効果および交互作用は有意ではなかった(それぞれ $F(1, 77)=.42$, $F(1, 77)=.02$, いずれも *ns*)。

Cさんのケースについて、因子得点を従属変数、因子(2:嫌疑を高める情報、性格)と参加者(2:高齢者、若者)を独立変数とする2要因の分散分析を行ったが、因子の主効果、交互作用はいずれも有意でなかった(それぞれ $F(1, 77)=1.19$, $F(1, 77)=1.10$, いずれも *ns*)。参加者の主効果は有意傾向にあった($F(1, 77)=3.90$, $p<.10$)。

次に、Cさんのケースの「嫌疑を高める情報」因子を構成する項目(Table3の⑧～⑩)に対する回答の平均値を「嫌疑を高める情報」得点、「性格」因子を構成する項目(Table3の⑥, ⑦)に対する回答の平均値を「性格」得点とし、嫌疑への影響の程度を従属変数、因子(2:嫌疑を高める情報、性格)と参加者(2:高齢者、若者)を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、参加者の主効果は有意でなかったが($F(1, 77)=.85$, *ns*)、得点の主効果は有意傾向にあった($F(1, 77)=3.87$, $p<.10$)。また、交互作用が有意であった($F(1, 77)=3.99$, $p<.05$)。単純主効果の検定では、「嫌疑を高める情報」における参加者の効果が有意傾向にあった($F(1,$

154)=3.68, $p<.10$)。また、大学生における因子の効果が有意であった ($F(1, 77)=7.86, p<.01$)。

以上、Aさんのケースでは、嫌疑への影響の程度は、高齢者(2.7)が大学生(3.2)よりも有意に低かった。また、Cさんのケースでは、大学生の場合、「嫌疑を高める情報」得点(3.3)が「性格」得点(2.6)よりも有意に高かった。

さらに、「嫌疑を高める情報」得点、「性格」得点と、Aさんに対する嫌疑の程度、「自分への信頼」、「他者への信頼」、「不信」参加者の属性(高齢者2, 大学生1として分析を行った)との間の関連の強さを求めるために、スピアマンの順位相関係数を求め、有意相関検定を行った(Table6)。

Table 6をみると、Aさんに対する嫌疑と、「嫌疑を高める情報」得点、「自分への信頼」、「不信」との間に有意な相関がみられる(それぞれ、 $p<.01, p<.05, p<.01$)。

Cさんのケースについても同様に、「嫌疑を高める情報」得点、「性格」得点と、Cさんに対する嫌疑の程度、「自分への信頼」、「他者への信頼」、「不信」参加者の属性(高齢者2, 大学生1として分析を行った)との間の関連の強さを求めるために、スピアマンの順位相関係数を求め、有意相関検定を行った(Table7)。

Table7をみると、Cさんに対する嫌疑と、「嫌疑を高める情報」得点、「性格」得点との間に有意な相関がみられる(それぞれ、 $p<.01, p<.05$)。

さらに、上記の結果をもとに、Aさんに対する嫌疑、Cさんに対する嫌疑に影響する要因についての探索的モデルを構築するために、パス解析を行った。Figure2とFigure3は、その結果である。

Figure2とFigure3をみると、Aさんのケース、Cさんのケースともに、参加者が高齢者の場合、「自分への信頼」が高くなる傾向にあり、「自分

Table6 相関行列 (Aさんのケース) N=79

	1	2	3	4	5	6	7
1 参加者の属性 (大学生1、高齢者2)	1						
2 嫌疑	-.329**	1					
3 性格得点	-.184	-.205	1				
4 嫌疑を高める情報得点	-.192	.557**	-.167	1			
5 自分への信頼性	.464**	-.236*	-.172	-.141	1		
6 他者への信頼性	.151	-.156	-.108	-.051	.404**	1	
7 不信	-.118	.351**	-.158	.235*	-.256*	-.449**	1

* $p<.05, **p<.01$

Table7 相関行列 (Cさんのケース) N=79

	1	2	3	4	5	6	7
1 参加者の属性 (大学生1、高齢者2)	1						
2 嫌疑	-.187	1					
3 性格得点	.045	.224*	1				
4 嫌疑を高める情報得点	-.257*	.625**	.260*	1			
5 自分への信頼性	.464**	-.121	-.130	-.165	1		
6 他者への信頼性	.151	-.115	-.171	.071	.404**	1	
7 不信	-.118	.15	-.057	.052	-.256*	-.449**	1

* $p<.05, **p<.01$

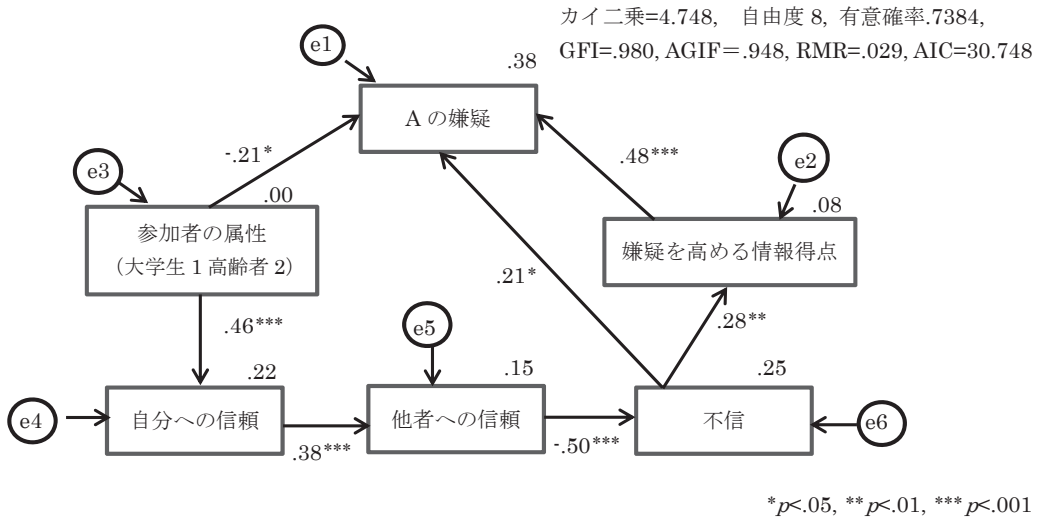


Figure2 パス解析の結果 (Aさんのケース)

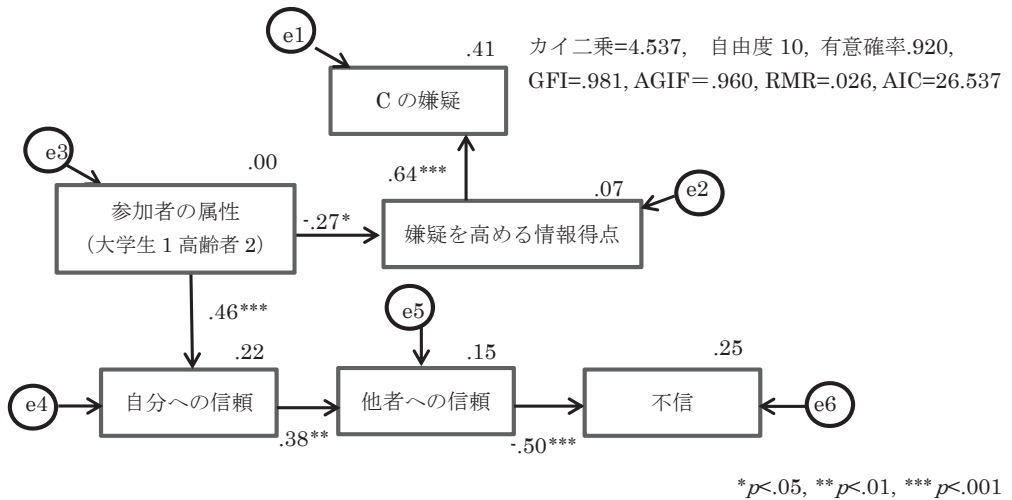


Figure3 パス解析の結果 (Cさんのケース)

への信頼”の高まりが“他者への信頼”を高め、“不信”を低下させている。また、両ケースとも、疑念を高める情報得点が高くなるほど、Aの嫌疑が高まることを示している。さらに、参加者が大学生の場合、Aのケースでは、Aの嫌疑が高くなることを示している一方で、Cのケースでは、疑念を高める情報得点が高くなり、この得点が高い程、Cに対する嫌疑が高まることを示している。

3. 研究2の考察

研究2の結果から、高齢者と大学生で、“信頼感”及び、2つの軽犯罪事件の容疑者に対する認識にちがいがみられた。

軽犯罪事件の容疑者に対する認識については、Figure2とFigure3に示したように、AさんのケースとCさんのケース、高齢者と大学生でちがいがみられた。容疑者が高齢であるAさんのケースでは、Aに対する嫌疑の程度は、高齢者

の場合に低下する傾向にある。また、高齢者は自分への信頼が高い傾向にあり、自分への信頼が高いほど他者への信頼が高く、不信の程度が低下する。そして不信の程度が低いほど A に対する嫌疑が低下し、嫌疑を高める情報に着目する程度も低下する。一方、容疑者が若年である C さんのケースでは、C に対する嫌疑の程度は、信頼感（自分、他者、不信）の影響がみられず、嫌疑を高める情報にもとづいて判断する程度に依存する。また、C の嫌疑に寄与する「嫌疑を高める情報」得点は、高齢者の方が低い。

Figure2 と Figure3 のパス解析の結果に違いが生じた要因として、事件内容の特性、参加者の特性が考えられる。A さんのケースでは、容疑者は高齢者で、C さんのケースでは、容疑者は大学生であった。また、それぞれのケースの事件の性質、提示された情報も異なっていた。参加者にとって容疑者が自分と同年代か、提示された情報が自分にとって身近なものかどうか、それらの受け止め方に影響した可能性が考えられる。たとえば、自分と同年代の容疑者や自分が理解しやすい情報に対しては、同情的に解釈したのかもしれない。また、Mroczek & Kolarz (1998) が指摘していた高齢者のポジティブバイアスによって、高齢者が大学生よりも容疑者の否定的な情報に着目する傾向が少なく、その傾向は自分に近い年代の容疑者 A さんの場合で顕著であったのかもしれない。実際に、A さんと C さんのケースでは、提示された情報が容疑者の嫌疑に及ぼす影響の仕方は異なっていた。

これらの可能性については、今後の研究でさらに詳細に検討していく必要があるだろう。

V. 総合考察

本研究で得られた結果から、高齢者の信頼感（自分、他者、不信）が詐欺被害やその他の犯罪

に対するリスク認知に影響を及ぼすことが示された。高齢者の自分に対する信頼が高い傾向にあることは、詐欺被害に対する警戒心の低下を招き、詐欺被害に遭う可能性を高める要因になるかもしれない。また、犯罪容疑者に対する嫌疑の程度を低下させ、犯罪に対する警戒心を弱める要因になる可能性もある。

今後の研究では、より現実の犯罪被害の場面に即した知見の積み重ねが必要だろう。詐欺被害の場合、とくに時間的に差し迫った状況での判断が求められる。こうしたストレスフルな状況においては、ワーキングメモリ容量の低下、情報の自動処理の促進が先行研究で指摘されていた。特異な状況下におかれた時に、詐欺被害をはじめとする犯罪被害に遭う可能性は、本研究で得られた結果とは異なる可能性が考えられる。

引用文献

- 天貝由美子 (1997) 成人期から老年期にわたる信頼感の発達. *教育心理学研究*, 45 (1), 79-86.
- Charles, S.T., Mather, M. and Carstensen, L.L. (2003) Aging and emotional memory: The forgettable nature of negative images for older adults. *Journal of Experimental Psychology, General*, 132, 310-324.
- Hasher, L. and Chromiak, W. (1977) The processing of frequency information: An automatic mechanism? Original Research Article. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 16 (2), 173-184.
- Healey, M. K. and Hasher, L. (2009) Limitations to the deficit attenuation hypothesis: Aging and decision making. *Journal of Consumer Psychology*, 19, 17-22
- Kahneman, D. and Tversky, A. (1996) On the reality of cognitive illusions. *Psychological Review*, 103 (3), 582-591.
- Kovalchik, S., Camerer, C. F., Grether, D. M., Plott, C. R. and Allman, J. M. (2005) Aging and decision making : A comparison between neurologically

- healthy elderly and young individuals. *Journal of Economic Behavior and Organization*, 58, 79-94.
- 松田修 (2012) 成年後見制度における高齢者の判断能力判定に関する心理学的研究—階層分析法による高齢者の意思決定過程の文責とワーキングメモリ負荷条件下における時間的プレッシャーの有無が判断過程の成績に与える影響の検討—. *生存科学*, 22 (B), 103-114
- Mynttinen, S., Sundstrom, A., Vissers, J., Koivukoski, M., Hakuli, K. and Keskinen, E. (2009) Self-assessed driver competence among novice drivers a comparison of driving test candidate assessments and examiner assessments in a Dutch and Finnish sample. *Journal of Safety Research*, 40, 301-309.
- Mroczek, D.K. and Kolarz, C. M. (1998) The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1333-1349.
- 永岑光恵・原塑・信原幸弘 (2009) 振込詐欺への神経科学からのアプローチ. *社会技術研究論文集*, 6, 177-186.
- 長野利和 (2011) 高齢者の経済被害の現状と課題—警察の視点から—. *老年精神医学雑誌*, 22, 792-798
- 佐久間尚子 (2012) 認知心理学からみた高齢者の認知機能低下. *老年精神医学雑誌*, 23, 434-440
- Sprenger, A. and Dougherty, M. R. (2006) Differences between probability and frequency judgment of individual differences in working memory capacity. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 99, 202-211.
- Starcke, K. and Brand, M. (2012) Decision making under stress: A selective review. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 36, 1228-1248.
- Sweeney, J. A., Rosano, C., Berman, R. A. and Luna, B. (2001) Inhibitory control of attention declines more than working memory. *Neurobiology Aging*, 22, 39-47.
- 立山有希・藤田郁代 (2009) ワーキングメモリ容量に情報処理の複雑さが及ぼす影響. 高齢者と若年者の比較. *言語聴覚研究*, 6 (2), 69-76.

(受稿日: 2013. 6. 3)

(受理日 [査読実施後]: 2013. 12. 17)

Article

Effects of Elderly People's Cognitive Aspects Coming from Trust to Self and Others on Being Deceived

YAMASAKI Yuko¹⁾, NAKA Makiko²⁾, ISHIZAKI Chikage³⁾ and SATO Tatsuya⁴⁾

(Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University¹⁾,

Graduate School of Letters, Hokkaido University²⁾, Graduate School of Law, Nagoya University³⁾,

College of Letters, Ritsumeikan University⁴⁾)

This study examines the ability of elderly people to recognize crimes, such as fraud, and its relationship to the sense of their trust to themselves and to others. There have been numerous cases of elderly people becoming the victims of fraud, which is ever changing in its methods of deception. The reasons why elderly people become victims of such crimes are often listed as a decline in their cognitive functions, a tendency of being in isolated living conditions, and a "sense of trust" in themselves and others, as well as mistrust, which are peculiar to the elderly. We conducted two research studies on elderly people. The results show that the elderly participants tend to believe that the victims of fraud are responsible for their own deception. This tendency was more pronounced in elderly who had gained larger self-confidence. However, the elderly judged the victim's responsibility as significantly low in cases of billing fraud, which is often used on elderly people. They believed it likely that they could detect any fraud (study 1). Moreover, each respondent indicated that his or her reliability was higher than that of the younger participants (university students). Finally, they maintained their trust to others and themselves. It is shown that when the suspect in a theft incident is an elderly person, elderly people don't suspect them so much as university student age people do (study 2).

Key Words : Bank transfer scam, fraud victim, elderly, credibility

RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.29, 3-17, 2014.
